The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『夜窓鬼談』の「偽情死」に反映された風刺性
Author(s)	聶, 晶
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 31-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62029
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『夜窓鬼談』の「偽情死」に反映された風刺性

聶晶

1　はじめに

石川鴻斎は，日本幕末・明治期の詩文家・漢学者・画家である。天保四年（1833）に生まれ，少年期から儒者の西岡翠園，大田晴軒らに師事し，専門の漢学・詩文のほか和歌・俳句・茶道・南画にも通じていた。明治二十二年（1889）と明治二十七年（1894）に，鴻斎が書いた上巻と下巻全 88 編の『夜窓鬼談』という漢文怪異小説集が出版された。作品集では日本の昔話・能楽・浄瑠璃はもちろん，中国の南曲・唐伝奇・明清小説などの様々な文学ジャンルと芸術類型から題材を取り上げ，幽霊・化け物・怪奇などに関する数多くの物語を記している[1]。

その中に，怪異の要素以外，諧謔や風刺の要素を含んでいる作品も少なくない。それらの話は主に落語や歌舞伎などの話芸作品を翻案したものである。例えば,「阿菊」の一作は上方落語の「皿屋敷」,「阿多摩池」の一作は落語の「あたま山」,「祈得金」の一作は歌舞伎の「ひらかな盛衰記」からヒントを得て翻案されたものである。

さて，石川鴻斎は一体どのように原作を翻案したのか，翻案にはどのような特徴と目的があるのか，また，翻案を通じてどのような作品の性格が表現されたのか。これらの一連の問題を解明するために，本稿は,「偽情死」という一作品の原作を解明した上で，作品の翻案作法から原作との比較・分析を行い，作品に反映された風刺性および作者の意図を明らかにする。

2　『夜窓鬼談』の「偽情死」とその原作

『夜窓鬼談』下巻の第 35 編は「偽情死」という一作である。その内容は，以下の通りである[2]。

宇輪木艶二は江戸の南にある質屋の次男である。親友とともに臨海楼に登った際に，お蝶という遊女と出会って恋に落ちた。しかし，やがて艶二が用事で帰っていって，お蝶との連絡が数日絶えた。お蝶が悩んで下男に命じて艶二の行方を探りに行かせたが，何の結果も得られなかった。

ある夜，艶二がそっとお蝶のところに来て泣きながら言った「俺はここで遊んでいるために，実家の店から金を盗んで帳簿を書き換えた。しかし，このことが父親と兄貴にばれたので，勘当された。金が尽き，このままだと死ぬかもしれない。もしお前が俺との約束を忘れていないならば，一緒に心中しよう。」と。

「私もある豪農に言い寄られていて困っています。もしあなたと一緒に暮らせるならば，地獄でも構いません。」とお蝶が答えた。

そして，二人は心中を決意した。艶二が一気に海に飛び込んで沈んだが，お蝶は顔に水しぶきが掛かるので，躊躇しながらなかなか飛び込もうとしない。しばらく待つと水面から何の声も聞こえなくなり，お蝶は艶二がすでに死んでしまったと思い，部屋に戻っていって寝た。一方，艶二は投身したが，その川が意外に浅かったので死んでいなかった。お蝶の行動を見た彼は，呆れて実家に戻った。次の日，艶二が友人と出会い心中の顛末を友人に話した。そして友人が艶二のためにお蝶への仕返しを決意した。

その時，近所の家でお葬式をして品川の海晏寺まで行き，その友人も参列した。帰り際に，皆が臨海楼に登り，宴を開いてお蝶を呼んだ。お蝶は平気な顔でやってきた。友人が彼女に言った。「あなたは艶二が死んだのを知りませんか。」と。お蝶は知らないと答えた。すると，友人がまた言った。「艶さんは父兄に勘当されて，行方不明になった。先日のことだが高輪の漁師が男の死体が海に浮かんでいるのを発見した。その男の左腕には小さい包みが縛ってあるので，それを開いてみると，名前を記している遺書があって，その中であなたとともに心中することが書いてあったよ。今日は艶二のお葬式をし

[1] 石川鴻斎および『夜窓鬼談』については，既発表の拙論「『夜窓鬼談』から見る石川鴻斎の鬼神観とその展開」（『言語文化共同研究プロジェクト 2015』p. 67，2016）を参照した。（参照 2017/04/07）。

[2] 参考した文献 : 石川鴻斎 著，小倉斉・高柴慎治 訳註,『夜窓鬼談』春風社，2003，pp.460-464。(参照 2017/04/09)。

た。でも，どうしてあなたはここにいるのか。お蝶さん，あなたは人間なのか。もし人間ならば，艶二の冥福を祈ってくれ。そうしないと，彼が幽霊になってきっとあなたを探しにくるよ」と。

お蝶は，あまりの悲しみで泣きながら言った。「この間，艶さんが私のところに来て，家から追い出されたと話していました。そして，艶さんは私と心中しようと思って，私も同意しました。その後，艶さんは先に海に身を投げました。私も飛び込もうとしましたが，水に入ると着物が濡れるし，水を飲んだら腹痛にもなろうと思ったので，急に嫌になって自殺をやめました。今，艶二さんが亡くなって私一人しか生きていないとはっきり分かりました。約束に背くのは本当に恥ずかしいことです」と。言い終わると，お蝶は自分の部屋に戻っていった。しばらくすると，布で頭を包み，手には髻を持ってやってきて言った。「髪を切りましたので，どうかこれを墓に納めて下さい。少しは艶二さんの霊を慰めることができるでしょう。」と。

一座の人々は感嘆している。そこで友人は大声で叫んだ。「艶さん出ておいでください。お蝶は髪を切ったぞ。」すると，艶二は屏風の後ろから出てきた。

しかし，艶二を見たお蝶が微笑しながら，頭の上の布を取り除いて髪を見せると，なんとただ今切った髪はかもじであった。

「偽情死」の一作には，原作や出典などに関する情報が記されていないが，筆者が今日伝わる落語や笑話の演目を調べたところ，これは落語の「品川心中」[3]の流れとはかなり類似する。「品川心中」のあらすじを要約すれば，以下のようである。

前半は，遊女のお染と客の金蔵との心中についての話である。

品川の遊女であるお染が金のないゆえ，自殺を決断した。しかし，一人で死ぬならば情けないので，心中の浮名が立つように，なじみの客から貸本屋の金蔵を道連れとして選んで彼に心中を承知させる。

ただし，翌日になると，とんまな金蔵が脇差を忘れたゆえ，二人は桟橋から身投げをすることにした。

金蔵は怖くて体が震えて海に投身することができなくなった。すると，お染めは金蔵に自殺しなければ，七日経たない内に取り殺してやると脅し，そして後ろから彼を突き落とした。しかし，お染めが自分も飛び込もうとしたところに，店の人が「金が出来た」という知らせを伝えに来たため，お染は心中をやめて店へ戻ってしまった。

一方，飛び込んだところが遠浅だったので，金蔵は死んでいない。お染の話をすべて聞いた彼は親方のところへ行くが，家で博打をしていた親方たちが，彼のことを役人だと勘違いして全員大騒ぎした。最後に金蔵であったことが明らかになった後，落ち着いている人は一人しかいなかった。皆がその人を褒めると，「いや，実際には腰が抜けておりますから」と答えた。

後半は、主に金蔵の仕返しに関するものである。

金蔵の心中の顛末を聞いた親方はお染への仕返しを決意した。まずは，金蔵がお染を訪ねていき，部屋で話をした。そして，親方と金蔵の弟の二人がお染を探しに来て，別の部屋で金蔵の通夜についての知らせを伝えた。驚いたお染が，親方を連れて金蔵がいた部屋に戻ると，金蔵の姿の代わりに彼の位牌があった。すると，親方は金蔵が幽霊になり，お染を復讐しにくるので，頭を丸めなさいと脅し，お染の髪を剃ってしまう。そこに金蔵が登場し，後悔したお染に「お前がいつも客を釣るから，今は魚篭（比丘）にされたのだ」と嘲笑した。

「品川心中」とは「三遊派に古くから伝わる名作の郭噺である。一席物の噺としては大変長い

[3] 飯島友治 監修，「富久・品川心中」『古典落語名人会』（第 7 巻）筑摩書房，1970，pp.17－24。

ため，明治中期ごろからは，上と下に分けて演出するようになった[4]。」

実際には『夜窓鬼談』の上巻第 14 編である「鬼児」の最後に「これは林屋某から聞いた話である」と記しており，上巻第 41 編である「牡丹灯」の最後に「これは円朝氏が語る話である。」と書いており，そのほか，下巻第 37 編である「阿岩」の最後にも，「民谷氏がこの話を詳しく記している」と書いてある。これらの例をみると，石川鴻斎は落語家から題材を受け入れることが常にあるといえるだろう。このように，「偽情死」の一作は三遊派の名作である「品川心中」から影響を受けた可能性が存在しているということも推測できるだろう。

ちなみに，「偽情死」の主人公の名前は宇輪木艶二と呼ばれている。ただし，筆者の調査[5]によれば，宇輪木という苗字は実に存在せず，鴻斎のオリジナルものである。特に読み方からみれば，宇輪木は「うわき」と呼ばれている。「うわき」という単語の意味を調べると，（1）浮ついて落ち着きのない性質や思慮に欠ける状態。（2）陽気で，はでな性質や状態。（3）気まぐれに異性から異性へと心を移すこと。（4）妻や夫がありながら，他の異性と情を通じること，という四つの解釈がある[6]。以上の解釈と「偽情死」の内容を融合してみれば，恐らく鴻斎は（1）の意味を取り上げて主人公の名前を付けたのではないだろうかと考える。すなわち，「偽情死」の宇輪木は「品川心中」の金蔵と同じように思慮に欠ける人であるということを指すのではないのか。

3　「偽情死」と「品川心中」との比較

以上の二作の内容を比べると，「偽情死」は「品川心中」のプロットを基本的に継承しているものであると分かる。しかし，心中の提案者の設定や心中の理由，相手の反応，物語のオチなどに関する点での改作も無視できない。

3.1 心中の提案者およびその理由。

「品川心中」の場合には，遊女のお染が金のないゆえ死ぬことを決定した。しかし，一人で死ぬと，面子が立たないので，ぼんやりしている常連客の金蔵を騙し，自分とともに自殺させ，心中するふりをしようとした。しかし，「偽情死」の場合には，プロットが逆転された。艶二が家から追い出され，生活できないため，好きな女とともに心中しようとした。

つまり，両作とも金のないゆえ，主人公が死ぬと決意したが，心中の提案者と目的は全く異なる。「品川心中」の場合に，遊女が提案者であり，「偽情死」の場合に，客が提案者である。また，この二人の心中の目的もまったく異なる。「品川心中」のお染は面子のために，適当な人を選んだ一方，「偽情死」の艶二は生活が落ちぶれたため，恋に落ちている女とともに心中をはかったのだ。

3.2 相手の態度。

相手の態度とは心中の提案に対する相手の返事ということである。

この点からみれば，「品川心中」の金蔵は愚者であり，お染の甘い言葉に騙されて，心中に同意したのだ。また，心中の前に，恐ろしすぎるため，体が震えて海に投身することができなくなった。一方，「偽情死」のお蝶は，艶二の話を聞くと，自分がある豪農に逼られたことを言い出し，地獄までも艶二に付き従うと答えた。

この部分から，金蔵は性格の弱さあるいは知力に欠けるという原因でお染に騙されて心中をさせられるのだと分かる。これに対してお蝶は艶二に対する愛情が存在しているゆえ，心中をすることになったといえるだろう。

3.3 心中する際の行為。

「品川心中」の場合には，お染は躊躇している金蔵に対し，自殺しなければ，七日経たないうちに殺すと脅し，そして後ろから彼を突き落とした。しかし，金があるという知らせが来ると，直ちに自分が帰っていった。これに対して，「偽情死」の場合には，艶二は一気に海に身を投げ，

---

[4] 飯島友治 監修，「富久・品川心中」『古典落語名人会』（第 7 巻）筑摩書房，1970，p.16。

[5] 『全国名字大辞典』（森岡浩 編，東京堂，2011）および〔名字由来 net〕https://myoji-yurai.net/（参照 2017/01/10），〔名字データベース〕http://www.pachi.ac/~multi/cgi-bin/familyname/display.cgi（参照 2017/01/10）を確認した上で，宇輪木という名字は確かに存在していないということが判明した。

[6] 尚学図書 編，『国語大辞典』（新装版）小学館，1988，p.268。

そしてお蝶は顔に水しぶきが掛かるので，躊躇しており，しばらく待つと部屋に戻り，そのまま寝た。

この部分では，お染と艶二の性格が明確に表れている。すなわち，「品川心中」のお染は，利己主義的で虚栄心が強く薄情な悪人である一方，艶二は無能な放蕩息子ではあるが，悪人とはいえない。

ただし，ここには一つの問題が存在している。金蔵は騙されて心中することになったため，死ぬ際に心から恐怖が生じ，海に身を投げることができなくなった。これは一般人の死に対する正常な反応だといえる。しかし，お蝶は感情のために好きな男性とともに心中をしようとしたが，海に身を投げる際に，艶二の死んでいく様子を目の当たりにしたことで躊躇して，結局平然と自分の部屋に戻って行った。この行為からみれば，お蝶は艶二への愛情はまったくないといってよい。そうであるならば，前文での彼女が艶二に対する愛の告白とは矛盾している。この問題は後文で分析する。

3.4 物語のオチ。

落語としての「品川心中」には二つのオチがある。一つは，話の前半最後の「実際には腰が抜けております」という文であり，もう一つは後半最後の「お前がいつも客を釣るから，今は魚篭にされたのだ」という一言である。しかし，「偽情死」の場合には，唯一のオチは最後の艶二の仕返しに対するお蝶が髪を切ったという「他人を騙そうとしたが，結局自分が騙された」オチである。

実際は，筆者が『落語辞典』と『江戸小噺辞典』で調査したところによると，この「策士策に溺れる」オチは「星野屋」[7]（「この噺は，老境に近づいた男の，若い二号によせる愛着と不安な心，それに，特殊職業女性の心理の一端と慾を巧みにからませた，人情噺的の名作落語である[8]。」）や「三両残し」などの演目にもみられる。つまり，悪い遊女を懲らしめようと計略を企んだ男が，最後には騙され，遊女がかもじのみを切ったというオチである。これによれば，鴻齋は「品川心中」のプロットと「星野屋」のオチを融合して新しい「偽情死」を創作したのだといえるだろう。さて，なぜ作者がこのふたつの作品を融合させたのか。この理由は「偽情死」の最後の評論と組み合わせて分析するため，次の節で説明する。

3.5 遊女の人物設定

プロットの流れから「偽情死」を「品川心中」と比べると，遊女の性格についての設定が複雑になったことが分かる。「品川心中」のお染は話の最初から最後まで薄情な悪役を演じている。

一方，「偽情死」の場合には，お蝶の善悪は簡単に論じることができない。

まずは，艶二が登楼しなくなった際にお蝶は艶二を下男に探させ，また，艶二が心中を持ちかけた時に，嫌な豪農の男に見受けされるよりは艶二と心中することを選び，つまり，お蝶は自分から艶二とともに心中しようとし，本心から艶二の事を愛しているというイメージが表れている。しかし，艶二が自分の目の前で海に沈んだ後，彼女は平気で部屋に戻って寝た。もし心中の際に愛情の力が死の恐れに負けたので，お蝶が心中を諦めたということであるならば，艶二の死に対しこのように冷静に対応するのは，薄情すぎるだろう。ただし，もしお蝶を薄情であると考えると，その後，艶二の友人が訃報を伝えてきた時，彼女はまた何も隠さなく，艶二と心中したことおよび自分が心中出来なかった理由をすべて白状した、ということが首尾一貫しない。だが，この白状からお蝶が素直な人であるとは言えず，最後の仕返しの時に，彼女は再三艶二をからかい，髪の代わりにかもじを切った。つまり，この一連の繰り返しを通じ，お蝶の複雑な人間性および客との交際の知恵が明確に表現されている。このような設定を通じて，お蝶は男を騙す遊女より，自分の知恵で男とやりとりをする賢い女であるというイメージが現れる。なお，このように設定すれば，小説のプロットも変化に富んで，読者に新鮮さを示すことになるだろう。

4　作者の評からみられる創作意図

[7] 飯島友治 監修，「妾馬・星野屋」『古典落語名人会』（第 8 巻）筑摩書房，1970，pp.21－25。
[8] 飯島友治 監修，「妾馬・星野屋」『古典落語名人会』（第 8 巻）筑摩書房，1970，p.20。

それ以外，作者は古い落語の内容とオチを組み合わせた上で，文末には色事に関する見方を書いている。その概要は次のようである。

> 世間では，遊女の真心は卵の角，闇夜の月光のような（珍しい）ものだという説が流れている。しかし，遊女もまた人間である。（人間であれば,）感情と真心はないわけがないだろう。客には元々真心などというものがないため，遊女の方でも真心を尽くさないようになったのだ。もし客に真心がある一方で，遊女のほうに真心がなければ，実はそれは客の幸いだ。もし（客に真心がないのに）遊女に真心があるとすれば，（遊女はその）客に身を任せ，妻や妾になり客と苦楽をともにしたいと考えるだろう。だがそれは，（遊女をただの遊び相手と勧化手いる）客にとってはこれ以上ない不幸だろう。
>
> 遊女は本来両親や兄弟のために身を売って親孝行を尽くす者である。もし客に確かに真心があれば，彼女の窮状を救い，身請けをして故郷に戻してやるのが（遊女にとっては）最もよいことだ。もしそのような考えがなければ，彼女とともに春の花や秋の月などの風雅を観賞し，興を添えて楽しみをすることで十分であろう。

作者はまず女性の立場で遊女の無情に同情し，世間の「遊女は無情だ」という説に反駁し，客が無情であるため，遊女も無情になったという観点を示している。そして，男性の視点から，遊女の無情は実際に客にとっては幸いであると説明した。つまり，無情ならば，責任を果たす必要がなく，感情を入れないで，歓楽の時間をともに過ごすだけで十分であるということである。この上で，最後にも，感情のある場合の対策が記されている。つまり，もし客は誠に感情があれば，その遊女を身請けして自由にさせたほうがよいという見方を表している。

また，この評論を 3.4 での二つのオチを融合していることと組み合わせて分析すれば，作者の創作意図をも反映したのだと考えられる。

鴻齋はまず男性と遊女との心中に関する話を記し，遊女の薄情を描き，そして遊女が二度も男性をからかうと記した。こうして，物語の内容を豊かにする意図以外には，さらに遊女の狡猾と男性の愚かをも表現している。つまり，「遊女に対する同情」および「放蕩息子が遊女に感情を注ぐということに対する否定」を表していると同時に，鴻齋は，この話を通じて世間の男性に教訓を与え，「客と遊女はいずれも真心を抱いて交際しないのが，最も適当な選択だ」という見解を示している。

5　終わりに

以上の分析によれば，『夜窓鬼談』における「偽情死」の一作は，落語の「品川心中」と「星野屋」の二作からオチを得て作られたものであるということが明確に判断できる。しかし，オチを継承していると同時に，作者が翻案の中にも自分の見解を添えた。

すなわち，単なる原作の人物設定を継承せず，鴻齋は「偽情死」の人物をさらに複雑に描いた。遊女は客に感情を注ぐと同時に，完全な信頼関係を作らないということを記し，これに基づいた一連のやりとりを通じ，遊女の複雑な性格および客との交際の知恵を表現し，お蝶の豊かなイメージを作り出した。また，人物の複雑性の増加にしたがって話の物語性と諧謔性をも増えている。つまり，作者は読者に教訓性を与えると同時に，物語の中に笑いを誘う要素を込め，気楽な読み物にするために話を作ったのだ。

なお，最後の評論で，鴻齋は遊女に対する同情を示している一方，客の多情を風刺した。無情と多情の対策に関する説明を通じて自分の創作意図をも再度強調した。

参考文献：

飯島友治 監修，「妾馬・星野屋」『古典落語名人会』（第 8 巻）筑摩書房，1970。
飯島友治 監修，「富久・品川心中」『古典落語名人会』（第 7 巻）筑摩書房，1970。
石川鴻斎 著，吾妻健三郎 編，『夜窓鬼談』東陽堂，1889。
石川鴻齋 著，小倉斉・高柴慎治 訳註，『夜窓鬼談』春風社，2003。
王三慶ほか編，『日本漢文小説叢刊』（第一輯第 2 冊）台湾学生書局，2003。

古今亭志ん生 著，小島貞二 編，『志ん生廓ばなし・志ん生の噺 5』筑摩書房，2005。
東大落語会 編，『増補・落語辞典』青蛙房，1973。
武藤禎夫 編，『江戸小噺辞典』東京堂，1965。
森岡浩 編『全国名字大辞典』東京堂，2011。